



「学ぶ集団」を 育てるか？

この写真は、小学校の楽しい休み時間ではない。「先生が児童に授業する」のではなく、「正解を知らない児童同士」が教えあう——『学び合い』※と呼ばれるこの授業方法、一見、学級崩壊しているかのようにも見えるが、実際には崩壊どころか、非常に高いレベルでの「学びへの動機づけ」に成功しているのだ。その驚くべき成果の中に、ビジネス現場にも通底する問題意識、そして答えのヒントがあった。

企業と学校の共通課題、
その解のヒント

「自律的に行動する」「他者とうまくコミュニケーションできる」「自分だけでなく組織全体のパフォーマンス向上のために行動できる」——トップダウン式の組織が通用しなくなって以来、ビジネスの現場で強く求められる能力である。これとまったく同じ能力を子ども達が身につける『学び合い』という教育実践が、各地の学校で驚くべき成果を上げつつあるとい

う話を聞いた。しかも「道徳」ではなく「算数」や「理科」などの一般教科で、である。

『学び合い』歴9ヶ月

大阪府堺市立神石小学校の4年2組・古賀健一郎先生の学級。古賀先生は教師になって7年目の30代前半。この学校には春に赴任したばかりで、『学び合い』を導入して一年経っていないという。このクラスの『学び合い』を紹介しよう。

取材・文／伊藤耕太
撮影／林川 淳
協力／西川 純（上越教育大学教授）

◎授業の進行を生徒が行う

「今日の目標は、分度器を使って角を描くことができます！」です。がんばってください！」授業の幕を上げるのは生徒。先生は「わかる。っていうのはどんな角度の問題でも解けるっていうことやかな」とだけ話す。分度器の使い方には一切触れない。



◎いきなり『学び合い』が始まる
最初は個人作業で静かな教室だが、すぐに騒がしくなってくる。「なあなあ、200度って目盛りなのはどうやって測るん？」こんなに賑やかで大丈夫？



◎全部解いた子は先生と答え合わせ
「先生できたでー！」「ほらここ、200度なのに180度より狭いぞ！班の子に測り方教えてもらい！」
先生は解き方を教えず、「学び合い」の「促進」役だ。



◎クラス全体の状態を可視化する仕組み
全部正解した子は自分の名前シートを裏返す。
「できた？じゃあ一緒に裏返しといたるワ！」
ついでに班の子の分も。



◎「教える側も学ぶ」という逆転現象
「180度より大きい角度は……」
「ええ、全然わからへん！もう一回教えて！」
「じゃあこういう説明は？」
教える側も、教えることを通して自らの学びを深める。という逆説的なことが起こる。

驚くべき動機付け

期待と不安を抱きながら生で『学び合い』を見て驚いた。この子達は算数で学べる知識のみならず、「答えだけ教えてもダメ」「あきらめずに素直に質問する」「自分だけでなくクラス皆の成績を上げたい」といった普遍的に大切なことを体得していた。そして「学ぶ」ということそのものに対して、とても強く動機付けされている。

「学び合って」いるのは、教科だけではない

最初はなかなか『学び合い』が起きなかった。だがある時、子どもを信じきっていなかったと痛感する出来事を経験する。それ以来、子どものよいところだけを探して接するようになると、『学び合い』がうまく行きはじめた。クラスの雰囲気も変わってきた。互いに給食のエプロンを結んであげたりと、

優しい心が育ってきた。クラスの成績が上がりはじめた。そして意外なことに、普通の授業時にも、『学び合い』的現象が見られ始めた。

「子どもの心に火をつける力」

古賀先生にとって『学び合い』は、技法というよりは「考え方」だ。学校は人間性を磨くところだから、それができていけば一斉指導でも大丈夫はずだと考える。そして教師にとって必要な資質は「教える力」ではなく、「心に火をつける力」だという。人として大切なことが学べるんだということを、クラス全体に体験させてあげる。そうすれば子ども達は必ず応えてくれるのだ。

ビジネスの現場で喫緊の課題と なっている「自律性」と「人間関係力」。子ども達が体得していたのは、まさにそれらの力だった。『学び合い』は私達にも大きな学びと勇気を与えてくれる。

齋藤孝先生!

『学び合い』はビジネスパーソンにどんな意味がありますか？

教育からビジネスまで幅広く言論・実践活動をされている齋藤孝先生(明治大学文学部教授)に授業のビデオ映像を観ていただいた。

「隠さない強さ」が育っている

いま社会で最も重要なのはコミュニケーション力、他者理解力ですが、これらは座学だけでは身につけません。あらゆる教科を通じて身体を自分で使い、歩き回り、教え合うことで身につきます。その際、「人に優しくする」「素直にものを聞く」ために、「自分の弱いところを見せられる」という「隠さない強さ」が育つんです。このクラスでもそうですね。

ビジネスにも「先生増殖方式」が活きる

ビジネスの世界でも『学び合い』的対話が大事です。「他者に教える」というのは誇りある立場で、これを与えられれば主体的な学びが立ち上がります。先生側に立ち、「先生の顔を写す」。私は「先生増殖方式」と呼んでいます。初等教育以上の高度なレベルでも適用可能です。

「みんなの資源を掘り起こすコーディネーター」

このクラスでの先生の重要な役割は「学ぶ基本の構え」を浸透させていること。教師の仕事は、子どものモチベーションを上げるのが中心だからです。「教える側」の資源だけではなく、みんなの地下資源を掘り起こす。全部の資源を使う。そういうコーディネートをする存在が企業にも必要なんです。

「教える力」から「心に火をつける力」へ



◎「教えたい」と歩き回る子ども達
授業中に立ち歩き始める子たち。
「誰か教えて欲しい人いませんか？」
授業に飽きたのではなく、
他の班で助けが必要な子を探しはじめた。

◎「もっと教え方の上手な子」も連れてくる
「うーん、わからへん...」
「じゃあ他の子連れてくるわ!」
自分の教え方で足りなければ、上手な子の力もどんどん借りる。

◎「みんなが出来るようになりたい」強い気持ち
「これ合ってる...?」「うーん...おしい!もう一回やってみよ!」
友だちのノートを消しゴムで消して、
励ましながら一緒にがんばる、心打たれる光景。

◎先生は「解き方」を教えずに、ほとんどの子が正解
「いまの教え方はわかりやすいな」
先生は終始「解き方」は教えないが、
黒板の名前シールはどんどん裏返っていた。
最後に皆で「自分のがんばり」と
「友だちのよかったところ」を書いて授業は終了。